

- 文部科学省補助事業
- 令和2年度 ユネスコ活動費補助金 SDGs達成の担い手育成 (ESD) 推進事業
- 「ESDに取り組む教員の『地域と関わり合う力 (エンゲージ力)』を向上させるデジタル教材の開発」

## ESD動画教材

# 地域と関わりあう教師たち —ESDの発展に向けて—

副読本



OKAYAMA  
UNIVERSITY

岡山大学大学院教育学研究科 ESD協働推進室

## 目次

1. 動画教材「地域と関わりあう教師たち – ESD の発展に向けて–」 .....	1
動画教材制作の目的 .....	1
本書（副読本）について .....	1
2. 動画教材の活用方法 .....	2
学習・研修テーマ設定の例 .....	2
3. 動画に取り上げた事例（地域・団体） .....	3
4. インタビューについて .....	4
5. インタビュー集 .....	6
YKG 共同代表 室 貴由輝先生 .....	6
YKG 共同代表 井辻 美緒さん .....	9
岡山県立矢掛高等学校 高木 潤先生 .....	17
岡山市立御南中学校「スクール・パートナー」 今村 恵美子さん .....	20
岡山市立御南中学校 江口 峰男校長 .....	22

## 1. 動画教材「地域と関わりあう教師たち – ESD の発展に向けて–」

ESD の動画教材「地域と関わりあう教師たち – ESD の発展に向けて–」は、令和 2 年度 文部科学省 SDGs 達成の担い手育成 (ESD) 事業として、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会との連携のもと、岡山大学大学院教育学研究科 ESD 協働推進室が、事業課題「ESD に取り組む教員の『地域と関わり合う力 (エンゲージ力)』を向上させるデジタル教材の開発」に取り組む中で制作した、オンラインの動画教材です。

### 動画教材制作の目的

ESD をさらに発展させる上で重要となる、教師の「地域と関わり合う力 (エンゲージ力)」はどのように伸ばすことができるのか、という課題に対し、具体的な ESD の事例やその実践者の生の言葉に触れて、一緒に考えていくための素材を提供することを目的としています。

「ESD や地域連携はこうしたらうまくいく」といった答えやマニュアルを示そうとするのではなく、実際に教育現場で ESD を進めてきた現役の教師や、ともに歩んできた地域の人々の経験と変容に焦点を当て、様々な困難を乗り越えていく視点を探りました。

また、制作の過程では、現場の教師、学生、ESD に関わっている市民の方たちの参画を重視し、意見を取り入れるようにしました。こうした過程が新たな教育実践への刺激となったり、学びを共有し、振り返り、意味付けをしていく ESD の過程となったりすると考えられるからです。

同様に、動画教材はインターネット上に掲載し、さらに英語字幕をつけたものも制作しています。より手軽に、そして様々な場、地域で視聴していただけるようにすることで、動画教材を起点とした学校・地域・国を越えた学び合いも生まれることを期待しています。

### 本書 (副読本) について

動画教材の副読本としての本書は、およそ 15 分間の動画教材をさらに研修や大学での授業などに有効に活用していただくために作成しています。動画教材と同様に、オンラインで閲覧・ダウンロードが可能です。

※視聴方法・ダウンロード方法の詳細については、26 ページをご覧ください。

本書は、動画教材の内容に関わる団体・地域や人々の詳細な情報を資料として提供しています。さらに、インタビュー集において、動画の中で語られた内容を詳しく知ることが可能です。動画の視聴後もそれぞれの関心に応じて、さらに学びを深められていくことを期待しています。

## 2. 動画教材の活用方法

この動画教材は、ESD に関心のある方、ESD に取り組もうとしている学校の先生や、教師を目指す学生を主な対象としています。また、地域で学校と連携した活動に取り組んでいる方にも視聴いただけることを期待しています。個人での視聴はもちろんのこと、例えば、次のように動画を素材にして ESD の教員研修会を実施することも可能です。

### 学習・研修テーマ設定の例

- 「ESD に取り組む上で重要となる、教師としての視点とは」
- 「ESD はなぜ地域とともに進める必要があるのか」
- 「ESD を地域とともに進める上で、どのような視点・仕掛けが大切か」
- 「ESD を地域とともに進める上で、私たちの学校内に必要な仕組みを考える」
- 「地域での活動の質を上げていくために、どのような工夫が必要か」
- 「児童・生徒が地域に出て学ぶことにどのような意味や意義があるか」

### 例) ESD の校内研修会

あらかじめ研修テーマ(問い)を参加者とともに設定しておく。

可能であれば、地域で連携して活動している方や、コーディネーターにも参画してもらう。

- ① イントロダクション – ESD に関する基礎知識
  - ② 全員で動画を視聴する (または、各自であらかじめ視聴しておく)
  - ③ グループに分かれ、気づいたこと、動画から学んだヒント、大切だと思った点、印象に残った点などを自由に出し合い、全体で共有する。
  - ④ あらかじめ設定したテーマに基づいて、グループに分かれてのディスカッションを行い、全体で共有する。
  - ⑤ 共有された意見を踏まえ、自校の ESD の発展に向けた「アクション・プラン」を作成
  - ⑥ アクション・プランの発表／まとめ
- ➔ 一定の期間をおいて、アクション・プランの進捗状況の確認と相互(自己)評価を行う。

### 3. 動画に取り上げた事例（地域・団体）

**矢掛（やかげ）町**：岡山県の南西部に位置する人口約 14,000 人の町。江戸時代は旧山陽道の宿場町として栄え、現在でもその面影を残す街並みが残る、自然豊かな地域である。町のほとんどを山間部が占めており、高齢化や 18 歳人口の流出といった課題も抱えている。一方で、YKG および矢掛高校の取り組みは ESD として、また地域連携の好事例としても知られており、地域全体での ESD の取り組みに注目が集まっている。

**YKG**：一般社団法人「やかげ小中高こども連合」。2015 年に活動開始。年代を越えてこどもたちが主体的に活動し、地域社会になじみ、地域を支える社会人となるように育成するとともに、中山間地域の地域おこし・地域創生における若者の役割を自覚させ、矢掛町の発展・充実・振興に資することを目的としている。町・地域と協働して「こどもが主役のまちづくり」を進め、地域住民もこどもも地域活動の一員と認識し企画段階からこどもの意見を取り入れるようになってきている。（CANPAN ウェブサイト参照）

**岡山県立矢掛高等学校**：統廃合の後、町内唯一の高校となった。ESD を実践する地域拠点でもあるユネスコスクールに認定されている。また、「やかげ学」と名付けられた特色ある取り組みが有名であり、学校設定教科「環境」の中から、地域との連携やボランティア活動の部分を分化・発展させた教科として位置づけられている。生徒が学校を飛び出し、地域の小学校や高齢者施設等で長期間に渡り活動し、社会性やコミュニケーション能力を身に付け人間として成長している。（矢掛高校公式ウェブサイト参照）

**御南（みなん）地域**：岡山市の中心部から南西に約 5.5km の笹ヶ瀬川の東岸に位置する学区。かつては純農村地帯であったが、経済の急速な発展に伴って市街地へと大きくその姿を変貌。昭和 43 年の岡山県卸センターの進出後、地域の区画整理が進められ、県内の卸売業の一大拠点としての役割も担っている。さらに、JR 北長瀬駅の開業、バイパスの開通等により、近年、交通の利便性が大きく向上し、人口の増加や流動もいっそう著しくなっている。令和元年 12 月末の学区人口は 31,739 人。JR 北長瀬駅周辺の「操車場跡地にできる新公園を活用する市民の会」による新しい公園づくりや、持続可能な社会づくりを意識した地元住民の学習会、多様な世代を巻き込んでのイベント開催などの取り組みが進んでいる。

**岡山市立御南中学校**：2020 年度の生徒数 877 名、級数 28。御南中学校区の 4 校園（今幼稚園・西小学校・御南小学校・御南中学校）が、平成 24 年 10 月に岡山市から地域協働学校の指定を受けている。評価部会、学校教育部会、健全育成部会、地域連携推進部会、学校支援部会、広報啓発部会の 6 部会を組織として有し、その 6 部会のいずれもが 4 校園の教職員と地域の方を構成員として成り立つ。各部会は「校区で取り組む子どもの育成」という共通認識のもとに、それぞれの機能を生かしながら着実に取り組みを進めている。地域や関係機関との連携により生徒指導の充実を図ることを目的として設置された健全育成部会が中心となり、平成 25 年から「御南中学校スクールパートナー」として発足。生徒たちへの声かけや校内美化活動を行ってきた。（岡山市立御南中学校ウェブサイト参照）

## 4. インタビューについて

●動画の前半部分では、矢掛町の YKG の活動の様子を取り上げ、YKG を立ち上げた二人の方（室貴由輝先生・井辻美緒さん）へのインタビューを行いました。

YKG は地域にもしっかりと認知され、学校との良い繋がりを持って活動しています。活動を見守る大人たちの間でも、こどもの本来持つ力を伸ばすビジョンが共有されています。大人たちも、こどもたちの生き生きとした体験と成長と一緒に楽しんでいます。

YKG ともつながり、ESD の推進・地域連携と活動継続の仕組みも作ってきた、矢掛高校の高木潤先生にも話を伺いました。高木先生には ESD との出会いから、元同僚の室先生らの始めた取り組みをより継続性のあるものへと発展させた経緯、また先生ご自身の課題を乗り越える上での視点や、変容についても振り返っていただきました。

矢掛町出身の大学生で、中学・高校時代に室先生・高木先生と出会い、YKG のメンバーであった東山さんの想いにも触れ、YKG や矢掛高校の活動、そして教師との出会いのもたらす影響についても考えました。

インタビューを行った人を紹介します。



**室 貴由輝先生**：YKG 共同代表。元・矢掛高校の体育教師。自然の中で生き物のいのちの営みに触れて目を輝かせる生徒の姿に触発され、地域での体験を重視した環境教育を始めた。ESD の推進と「環境」科目の創設に尽力し、現在は岡山県教育庁高校教育課で、高校の魅力化事業に取り組んでいる。



**井辻 美緒さん**：YKG 共同代表。自分自身の3人の子育てや、母親グループの活動など様々な経験を経て、異年齢のこどもの交流や地域の居場所づくりに着想を得て、室先生と YKG を立ち上げた。現在は矢掛高校の地域コーディネーター、岡山県社会教育委員も務め、活動の幅を広げている。



**高木 潤先生**：矢掛高校の社会科教師。YKG を始めとする地域の様々な人とつながりながら、矢掛高校の ESD の仕組みを支えてきた。同校の ESD 課主任を務める。また、岡山県内のユネスコスクール加盟校の高校どうしの交流を進めるなど、地域を越えたネットワークの構築にも尽力している。



**東山 瑠夏さん**：矢掛町（中学・高校）出身の大学生。中学時代、岡山市で開催された「ESDに関するユネスコ世界会議」では、海外からの参加者のためのエクスカージョン・プログラムで、矢掛町の案内役を務めた経験がある。YKGのメンバーとしても活動した。現在は「岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク」の活動を支える学生スタッフとしても活躍中。

●動画の後半部分では、岡山市の都市部に舞台を移し、現在は持続可能な地域づくりの活動が盛んな御南地域の様子を取り上げ、中学校の教育改善と地域との連携に尽力している二人の方（今村恵美子さん・江口峰男校長先生）へのインタビューを行いました。

急速に発展した御南地域。中学生の問題行動に悩んでいた時期もありましたが、学校が地域と連携して教育を進めることで、状況は大きく改善されました。御南中学校の「スクール・パートナー」として10年以上前から活動を進める今村さんにこれまでを振り返っていただき、関わる上での視点や活動の成果について語っていただきました。

御南中学校が地域と連携して行うアプローチのひとつが、ボランティア活動です。校長先生に、教育理念や学校運営方針について、ご自身の経験を踏まえながら語って現在では、地域社会の未来について真剣に考える大人たちと教師がつながり、地域の中で役割を得て輝く生徒が増え、現在ではくじ引きをしなければならないほど、地域活動（ボランティア）への参加が増えたそうです。地域の方の姿から多くのことを学んだ生徒たちが、地域づくりを支える主体として成長している様子にも触れました。



**今村 恵美子さん**：御南中学校の「スクール・サポーター」の一員として、初期の頃から中心的に活動してきている。中学校の中庭にある菜園づくりに関わりながら、中学生への心のこもった温かい声かけや、地域での居場所づくりに取り組んできている。



**江口 峰男先生**：御南中学校校長。自身の社会教育施設での経験を基に、生徒の直接の体験を重視し、主体性を育む教育、地域と密接に連携して進める教育に取り組んできている。生徒が活動する現場に積極的に出向き、生徒たちの成長を讃えて手作りのトロフィーを贈呈したり、校長室だよりを通じて発信したりしている。

## 5. インタビュー集

### ■YKG 共同代表 室 貴由輝先生

#### 1) ESD との出会い

最初に環境教育に出会いました。その環境教育を始めたきっかけは、ある体育の授業での出来事でした。ランニングも学校の中だけだとあまり面白くないので、週に1回、校外に出て走っていました。5月のある日、橋の上から川の中が見えました。ちょうど魚の産卵期で、オスとメスが追いかっこをしていました。ある女子生徒は魚が珍しかったらしく、上からずっと見ていたところ、オスがお腹の大きいメスを川底に押し付けて、次の瞬間にメスが産卵したのです。そしてその後オスが放精するのも見た彼女はすごく興奮して「先生、今見た？見た？」と、目をキラキラさせながら話しかけてくれました。僕自身もそういうのを生で観るのは初めてだったので、すごく興奮しました。その時、「自分たちが今まで学校の中でやってきたことは何だったのか。」と思いました。「授業の中で生徒たちがこんな風に活き活きと何かを訴えてきたことはあったかな？」と。そして、こういうことをすればきっと生徒たちは心が動くのだと思ったのが、1番のきっかけです。

#### 2) 活動の発展

当時、リアルな体験というのが大事だと思い始め、例えば高校生と川や川の生き物を直接結びつけるような活動をする、環境の問題、ごみの問題などが自分ごととして入ってくるのかなと思いました。ゴミ拾いの活動もやっていましたが、それまでは単発でした。そうではなくて、生徒が川の立場になって考えるとか、川に住む生き物の立場になって考えることができたらいいなと思いました。そして始めたのがホタルの繁殖です。ホタルを飼育して、卵を産ませて、幼虫を飼って、それを放流する。そうすると、自分たちがホタルの親になった気分というかホタルの気持ちになれるので、川が綺麗でなければいけない、というのを生徒たちはリアルに感じたと思います。



放課後の活動でしたが、当時協力的な理科の先生が理科の授業の中で観察の仕方やスケッチの仕方を色々教えてくれたりしました。放課後、課外、教科内が上手くリンクしていたのだと思います。

#### 3) ESD 活動を始めた頃の周囲の反応

最初は、「何を変なことやっているんだ？」というか。「何を勝手なことをしているんだ？」みたいな感じでした。多分、他の先生からみたら遊んでいるようにしか映らなかったのではないかと思います。しかし、数年後には高校にも総合的な学習の時間が導入されることになっていたので、それらの活動が教科横断的な学びであることや、学校の外のことと教科の内容をしっかりと結び付けて生徒が理解できるようになっているというのは、総合的な学習の時間を設計する時にとても役立ちました。また、それを通して周囲の先生も理解を示してくれたというのはあります。

#### 4) 総合的な学習の時間の導入に伴う、地域連携の課題

当時勤務していた学校は、閉校の危機にありました。よって、地域と連携することは、総合的な学習の時間に関わらず必要なこととしては捉えられていました。学校の中で取り組んでいることは広く発信もしていたし、地域の方にも協力を得るということは、割と自然に受け入れられていったと思います。

当時勤めていた学校で総合的な学習の時間を入れていく段階ではさほどハードルが高かったわけではないです。それよりも寧ろ、その学校が進学校と統廃合された時に、新たに学校設定科目を作ることになった時の方が、抵抗は大きかったと思います。

## 5) 新たな学校独自設定科目を作る取り組み

総合的な学習の時間は上手くいっていましたが、どうしても総合的な学習の時間は学年任せになってしまったり、人が変わると上手くいかなかったり、ボリュームが下がったりしてしまう。よって、責任を持って教える、伝えていく人が必要だと思いました。学校設定科目だと色々な教科の先生が関わることができる、そういうものにしたと考えました。

## 6) 生徒、教師の変容

授業だけでなく、課外、放課後とか土日、長期休業中の活動も含めてですが、持続可能な社会というのをとにかく意識して生徒には伝えるようにはしていました。生徒の中にも「これって持続可能なかな？」という視点で、ものを話すとか、理解する、見るということが増えてきました。

今までだと生徒たちは、活動をするにしても、勉強するにしても、目的がぼんやりしていましたが、**生徒たちにとっては「持続可能な社会に向けて」という目標を見つけられたような気がします。**よって、進学先を決める際に、「〇〇大学」という名前ではなく、「こういうことを学びに大学に行きたい!」という生徒が増えたというのは、活動のひとつの成果だと思います。エネルギーのことを勉強したいとか、もっと負荷が少なく熱を伝えるような電線の研究がしたいとか、プラスチックを分解するような微生物とかを研究したいとか、具体的な目標を持って進学する生徒が増えてきました。いわゆる活動評価型の入試にどんどん生徒たちが受験して進学を決めていくということが起きました。

こうした生徒たちの様子を見て、周囲の先生も大きく変わりました。最初は「近寄らないでいよう。」「余計な仕事が増えるぞ。」といった様子だった先生たちが、**生徒の変容を見た時に、「やっぱりこれは何か意味があることなのではない**

**か」と感じてくれたのではないかと**思っています。すごく協力的になったし、参加してくれる先生も増えました。すごく変化したと思います。

私と同様に、同僚だった高木先生は、ESDは学校の中だけでやることではないし、家の中だけでやることでもない、**生活全体がESDだと気づいたのだ**と思います。特別なことではなく、一人一人が「これって持続可能なかな?」とか「どうやればそういうところに辿り着くのかな?」ということを意識しながら生活することが大事なのだろうと思います。生徒もたまたま受験で役に立ったり、成果が出たりしましたが、本当のことを言えば、そこから先、日常生活の中でその視点を持って生活していく、そういう生徒が増えたら良いというのが当時の狙いでした。

## 7) 自分自身の変容

高校だけで取り組むのは限界があると感じたし、転勤で先生が入れ変わっていったら多分ESDそのものが薄まっていくだろうと思っていたので、地域で学校をサポートする仕組みや、小学生、中学生、高校生という縦がつながる仕組みを作りたいと思っていたのです。ちょうどそのタイミングで私が矢掛中学校に異動したので、高校に高木先生もいて、小学校は「やかげ学」の繋がりでいろいろな先生を知っていたので、「小中高こども連合」という仕組みを学校主体で作りました。同じ頃に、井辻さんという子育て中のお母さんが、「矢掛で育つ子どもの未来について話すカフェ」という場づくりのイベントを企画したのです。私たちもその企画に参加したら、小中高こど



も連合の小中高生もいたので、「じゃあ一緒にやろうよ」と。そこに参加した小中高生がすごく主体的に活動を始めて、自分たちでYKG60という名前をつけました。YKG60ができたことで、学校から地域へ、という変化はすごく大きくなったとは思っています。



## 8) YKG「リモート・そうめん流し大会」について

YKGは、町の良いところや悪いところを考えて、悪いことをなくしましょう、良いところはもっと発信していきましょう、という活動から始まりました。西日本豪雨災害の時には、自分たちで夜市を始めたり、リサイクル品を集めて被災された方に持って帰ってもらったりもしました。今年はコロナのために、全く活動ができていなかったのです。大人も今年は厳しいかなと思っていましたが、子どもたちの方が「何かやりたい!」と言ってきてくれ、急遽集まりました。その話し合いの中で、中止になるはずの「流しそうめん」をコロナに配慮した形でできないかな?というのを考えた。それが「リモート・流しそうめん」の企画です。

発想そのものも凄かったし、ビデオ編集も場所選びも、計画すべてを、その時中心になった中学生たちがちゃんと自分で考えてできるというのはすごい力だなと思いました。

大人は学校でも家でも、「子どもにはここまでしかできないだろう」、「ここは大人が準備しなきゃいけない」と考える傾向があります。でも、

実は子どもたちは自分たちがやろうと思ったことに対して、色々な協力を得たり自分たちで考えたりしてやっていくのだな、というのをすごく感じました。きっとそういった活動一つ一つがまた自分たちの自信になり、次のことに向かっていく原動力にもなるのだと思いました。

## 9) YKGの発想力や主体性を伸ばす場を作る、大人たちのスタンスは?

よく使っているのが「放牧」という言葉です。できるだけ自由にやりたいようにやれる場というのが必要なのではないかと思います。これは高校の中にいる時もそうでしたが、あまり大人が線引きをしすぎるのは良くないと思っています。どちらかと言うと、それが子どもの可能性を潰している気もします。とは言え、最初は子どもも逐一「これをやっても良いんですか?」と聞いてくる。そういう時は、「やってみれば?」とか、「自分たちはしたいの?したくないの?」という聞き方をしたりしました。やっても良いと分かった時に、子どもたちは今までの縛りが外れて、持っている能力が広がっていくのかなと思います。今のYKGの中学生は初期の頃から入っているから、その積み重ねがあり、そういう力が伸びたというよりは、元々ある力が開花した、という風に捉えています。

## 10) 失敗の捉え方

年度初めにやると言っていた活動ができなかったり、来年再来年に繰り越されたりといったことは沢山あります。しかし、失敗と思われているようなことも、次に向けてのスタートになるかもしれないし、いい材料になるかもしれない。だからあんまりYKGの活動の中では失敗とは思っていません。外から見たら失敗と思われていることも沢山あるのだろうなとは思っています。活動そのものが失敗かもしれないですし。・・・そんなことは沢山ありますね。

## 11) いち地域人として

矢掛という町の1番の売りが宿場町で、本陣や脇本陣など、当時の通りがあるというのはすごく大きいと思います。また、矢掛商業高校という学校がなくなって、矢掛高校と一つになったということも乗り越え、やはり町に学校があることは大

切で、それをいかに次に繋いでいくか、古いものを大事にしながらいかに新しいものを生み出していくか、という点では、矢掛の町というのはいい形で進んでいっているのではないかと思います。それに直接高校や YKG の活動が関わっているかは全く分からないですが、ただ町自体がそのようなエネルギーであるとか、素地を持っているというのを私はすごく感じています。元々私自身は矢掛の生まれでも育ちでもないけれど、結局ここに住んでいる、というのはそういう ESD 的な要素が多分あったのだろうな、というのは今でも感じます。

## 1 2) 小さな地域から成り立つ大きな世界—社会に向けて教師や学校ができることは？

高校でいうと、地域とか学校外の繋がりが今まですごく薄かったのだと思いますが、ここ数年でかなり進んできていると思います。ただ、学校だけが突出したものになるのではなく、色々な要素が一緒になっていくということが大事だと思います。特に私自身は、リアルな体験であるとか、実際に地域で何が起きているのかを感じて受け止めて、それをどうしていけばいいのかを、学校の教科や学びと上手く結びつけて、「自分ごと」にしていくことが大事だと思っています。

## 1 3) 2018 年西日本豪雨災害への対応

矢掛高校は岡山県内で 1 番被災した生徒が多かった学校です。やはり ESD に取り組んでいることが、様々な角度から生徒のサポートや、その後の活動にも繋がっていると思います。YKG で言うと、YKG のメンバーが 1 番多く住んでいるのは、矢掛町内で大きく被災した地域でした。YKG のメンバーは次の日から動いています。さらに夏祭りや盆踊りなどのイベントが中止になった。あの時に子どもたちは「何か楽しいことをしたい」と言って、8 月の後半には夜市を自分たちで作りました。そこで、様々なリサイクル品や不要になったものを集めて、被災した人に持って帰ってもらうという活動もした。災害のために色々なイベントが中止になったからか、500 人を超える人が来場しました。「ありがとう！」と声を掛けてもらいました。そこから色々なイベントを子どもたちが次第にするようになったのです。あの時の子どもたちの力は凄かったなと思っています。

す。ただ子どもたちは自分たちがイメージした以上に人が来たから、忙しすぎて自分たちは楽しめなかったというオチはありますが。でもやはり ESD は、自分以外の立場になってものが考えられる、外から自分たちを見ることができる。そういう視点が持てるのも ESD なのかなと思います。

**ESD とは「視点の教育」だと思っています。自分のことばかりでなく、「被災した方はどうなのだろう？」とか、「こういう時にどういう風に思っているのだろう？」とか、そういった人の思いがイメージできるということ、そういったことがすごく大事なのかなと思います。**

今回のコロナ禍でのそうめん流しも、そういう思いや発想だと思いますし、それは YKG だけではなくて矢掛高校の ESD もそうだと思います。



## ■YKG 共同代表 井辻 美緒さん

### 1) 「リモート・そうめん流し大会」について

子どもたちが、「映像を見ながらそうめんを食べれば、流しそうめんになるのではないか？」と言うので、大人には想像がつかないことでしたがそれは面白いと思いました。撮影許可を取りに行くことや、どのように動画にするかは子どもたちに全部任せました。色々な場所で撮影をしていくチームと、そもそも矢掛にはそうめんの歴史があるので、それを伝えていくチームとに分かれて進めていきました。

### 2) 子どもの興味関心・モチベーションを高める

最初、子どもたちは矢掛町にそうめんの歴史があるということは全く知らず、興味も無さそうでしたが、それが特産物であるということは知っていました。そこで、「歴史の角度で調べてみたら面白いかもしれない?」、「子どもたちが知っている水車とそうめんはつながっているかもしれない?」、「そもそもそうめんは何でできているのだろう?」、「そうめんはどこから来たの?」、という投げかけをしていきました。室先生から情報を得て、図書館に行ってみました。子どもが図書館の人に経緯を説明したら、本を出してきてくださったのですが、その本は小学生には難しすぎました。著者の名前を見たら近所の人で、直接話を聞いた方が良いので行くことになりました。

### 3) 子どもたちに全部「任せてみる」

その子の状況にもよるのですが、基本的には丸投げをします。丸投げをして、どうにもこうにも動かないときには、大人がヒントを渡すという感じですが。

これは私の個人的な問題ですが、最初の頃は「きちんとしなければいけない。」とか、「何が正解なのか」、ということに、私がこだわっていました。「私がそれで大丈夫なのか?」、「迷惑かけないだろうか?」とか、「変な評価をされないだろうか?」などと思っていた頃は、丸投げすることは怖いと感じていました。

### 4) 「リモートそうめん流し」本番

子どもたちには毎回驚かされますが、今回も完成度にびっくりしました。子どもたちだけでこんなにできるのだ、と思いました。映像が全てではないですが、映像を撮るまでに至ったことも、出来上がった映像をあそこまで作り上げることもすごいと思います。当日の司会もなんとか自分たちの力で作っていた。違う大人の方がサポートしてくださっていたのもありましたが、私はほとんど関わっていないので、あそこまでやり抜いたのは、全部含めて、すごいなと思いました。

### 5) 子どもたちの自由な発想

今のコアなメンバーは中学生が多いのですが、小学校1-2年生の頃は上の子に引っ張られていたり、よく分からないけど一緒にやっていたり、

という様子でした。しかし、だんだん力をつけてきて、3年目ぐらいからは、自分の意志でやりたいように動いていると思います。

### 6) YKG を始めた経緯

大きく2つの流れがあります。1つは自分自身のチャレンジです。私自身、善い・悪いということにすごくこだわってきました。人の顔色を伺うような生き方をずっとしてきました。大人になって様々な活動をしていく中で自分自身の気持ちや思いを表現していく生き方がとても大事だなと思いました。もう1つは、結婚して矢掛町に引っ越してきて、最初は疎外感を持っていました。例えば、商店街の大人気のイベント、「夜市」があります。最初の年はそこを歩いていても誰にも声をかけてもらえなかったのです。でも、夫は地元の人なので、色々な人に声をかけられて、歩くたびに食べ物ももらっていました。とても親密な感じのするイベントだと思いました。子どもが生まれてつながりが増えていくにつれ、私自身にも声をかけてくれる人が増えていきました。女性の集まりで活動しているのですが、そのつながりで「みおちゃん」、と声をかけてもらう機会が増えていきました。すると、今までは「引っ越してきた町」とか、「夫が生まれた町」、という感覚でしたが、その時、やっとここが「私の町」のように思えて、町の人に受け入れられた感じがして、郷土愛や居心地の良さを感じました。それは顔見知りの人が増えていったのと比例していたので、居心地が良いということはすごく大事だと思いました。



長男が小学校5年生くらいのときのことで、駅にいつも矢掛高校の生徒がたくさんいるのです

が、そこで小学生の私の長男が仲良く話をしていて、「なぜ私の知らないところで、高校生と小学生が仲よくなっているのだろうか?」と思っていました。息子から「高校生たちは「矢掛塾」の先生だよ。」と聞きました。「矢掛塾」というのは、矢掛高校の「やかげ学」のひとつで、小学校に高校生が来て、まるで先生のように勉強を教えてくれるのだと。町の中にお兄ちゃん、お姉ちゃんがいる環境はとても良いと思いました。

もう一つは、矢掛町にはお寺がたくさんあります。そのうちの一つに、「瑞雲寺」というお寺があり、そこで毎年夏の「座禅の集い」という、小中学生が集まって異なる学年から成る班で一泊二日の合宿をします。私の次男はとても恥ずかしがり屋で引っ込み思案の一年生でしたが、6年生の同じチームの子にとっても憧れて、一泊二日ですごく成長したのです。もう別人のようになった。異年齢の子どもたちの集団で起こる化学変化や、年上児童に対する憧れのようなものは、子どもにすごくいい影響があるのを、その時に感じました。矢掛町の中で異年齢の子どもたちや大人も、みんなが色々な垣根を超えてつながり合うような場があるととても良いのではないかと考えるようになりました。

異年齢の子どもたちと大人たちが、人の子だから、とか、自分の子だから責任をもって育てないといけない、といった垣根をもっと超えて、皆が自由につながりあって話し合うような場ができるといいなと思っていました。ちょうどそのとき、矢掛町役場の合併60周年記念事業の募集があり、そのことを書いて送りました。すると、役場の人から私に「事業について詳しく教えてください」と連絡があり、驚きました。そこから慌てて、また別の活動でお世話になっていたNPOの方に協力してもらい『矢掛の子どもたちの未来について話すカフェ』、という事業をすることになったのが、YKGの始まりです。

## 7) 活動を開始してみても

最初の1年は、みんなで矢掛町の魅力について話をして、出てきたことを子どもたちで実際に実行してみようというということになりました。その保護者の中に室先生がいました。室先生は小学校・中学校・高校が繋がっての活動が大事だとい

うことで、「小中高子ども連合」という会を作って活動されていました。室先生と一緒に活動をしている子どもたちと、矢掛の良いところを伝える活動をしたいと集まった子どもたちはほぼ同じメンバーで、目的もほぼ一緒だったので、合流し、『やかげ小中高子ども連合-YKG』という名前になりました。この事業の中で、最初は町の良いところばかりをブランディングしたのですが、子どもたちはごみが多いと言うので、実際大人も考えることになりました。町内でごみのある場所を子どもたちが大人たちに見せるツアーを開催し、どのように減らしていけるかを考えようということで、最初の1年をスタートしました。



## 8) 周囲の反応

最初は、私が地域の人に活動の趣旨を伝えて、協力を依頼しに行きました。でも、地域の方は、自分が住んでいる地域に悪いところがあると思っていないのです。それなのに悪いところがあると決めつけられ、そこを直すために新しいもの入れますというのは嫌だろうなと感じました。自分たちはそういうことをやりたいのではない、ということは伝えなければならないと思いました。しかし大人が出て行くべきではないと思ったので、子どもたちに行ってもらうようにしました。子どもたちが、「私たちはこういう思いで、こういう活動をしたいと思っているので協力してください」と言うと、地域の方はあっさり受け入れてくれました。そもそも子どもがしたいことなので、地域の人に対しては、大人が先手を打つ必要はないのではと思いました。最初は子どもを守るつもりでついて行っていました。ですが、子どもが行った方が話は早く、子ども自身も成長すると思い、子

どもたちで行くようにしました。すると警戒されなくなりました。学校は、どちらかと言えば最初は様子を見ているという感じでした。

## 9) 子どもたちの変容

全員とは言いませんが、自己肯定感が低い、「自分の意見は多分通らないだろうな・・・」と、自信を持っていない子や、「これって正解ですか?」、「これでいいのでしょうか?」という考えが先に来て動けない子が本当に多かったのです。最初の頃は会議をして、「やりたいことを出して」と言った時でさえも、やはりガチガチに考えてしまって、自分の意見を出せないことが多かったです。でも私が「犯罪や人を傷つけることはダメだけど、お金のことや様々なことの枠組みを外して、自分たちがやりたいことを自由に出してごらん」、と言うと、子どもたちは意見を出し始めました。小学生が凄い意見を出すと、高校生や中学生がその意見に乗っかってくるが増えてきました。実際にそれを実行しようということになったら、最初はその小学生はすごく緊張していました。ですが、地域の方は、活動の良し悪しではなく、子どもが地域に出てきてくれているということや、子どもが地域のために何かしようとしているだけで、「ありがとう」と言って、「君たちはすごいね」という目線で受け入れてくれます。別に何か成功したわけでも、何かをやったわけでもないのに、彼らが町に出たら人々に褒められたということがありました。例えば、ある高校生が「高校生になって褒められることが全然なくなりました。でも、地域のおじいちゃんやおばあちゃんに『頑張っているね。』と言われてすごくうれしかった。」と言う。何をしたのか聞くと、何もしていないと言う。大したことは何もしていないのに、地域の人に褒められたことがすごくうれしかったので、次にまた何かをしたい、という連鎖反応が起きました。つまり、自分が受け入れられた、認められたという経験から、では次これやってみよう、やって良いのだ、ということが増えていく。一人ではできないけれど、小学生・中学生・高校生の異年齢で協力し合えば、できることがたくさんあります。小学生はアイデアを持っているけど実績と経験がない、それを中学生、高校生が補います。さらに大人の力がいるときは、地域の方の力を借りて、やりたいことを地域で実

現する。そういう体験をしたときに、やればできる、みんなでやればできるのだという経験がひとつずつ増えていきます。最初の頃に、「自分は何もできません」、「どれが正解ですか?」と言っていた子どもたちが、「とりあえずやってみて良いのだ!」、「みんなでやれば何でも出来るから、やってみよう!」と、そんな風に変化していきま

## 10) 地域コーディネーターとして

最初に思ったのは、地域に関わりたいたいとか、地域の中で何かしたいと思う子は一部だ、ということです。矢掛高校の400人ほどの生徒の中で、地域に興味があるのはごく一部で、あとは本当に興味がない。地域にも興味がないし「地域って何?」というような、自分の将来自体にあまり興味が無いという子たちの方が、圧倒的に多いのだというのをすごく感じました。

そして、学校にはすごく壁があると感じました。私がコーディネーターとして行っているのは県立高校ですが、町と県の壁がすごくあります。私は垣根を超えてつながってこうという活動をのびのびとやっていましたが、学校に入った途端、垣根だらけでした。大事にしないといけない垣根もあるし、大事にしないといけないところもある・・・全然予想していた環境とは違うと思いました。



## 11) 学校の先生の仕事を知って

学校の先生も、基本的に誰かに何かを教えるということはすごいパワーがいる仕事だと思いま

す。誰かを育てようと思う仕事に就いているという時点で、先生は凄いと思います。人間というのは、「この空間のこの仕切りのこの仕組みの中だけで自分を発揮しなさい。」と言われたら、当然できなくなると思います。学校の先生が関わらないといけないのはこの空間のここの中だけで、すごく縛られているので、その縛られた中で、どれだけのことをやれるかという葛藤がすごくあるのだろうと、先生を見ていて思いました。学校の先生や学校ができる限界があるというのを感じました。

## 12) 学校の先生の役割

今、国内の教育の流れの中でも子どもたちをもっと地域に出して、地域の中で育てていく力も必要だと言われていますが、学校の仕組みを見ると、それはすごく難しいことだと思います。先生の勤務の時間もそうですし、**先生の数自体が少なく、業務が多重にあるような学校の中で、生徒を外に出して地域とつながって、それサポートして、ということをするには限界があるということ、見ていてすごく思います。地域がそこを担えたら良いのだろうと思います。**

私はコーディネーターという、地域と学校をつなぐ仕事をしています。そこがちゃんと機能すると、先生たちの負担が少なく、地域と学校がつながって、子どもたちが垣根を超えていろんなチャンスを得ながら成長できる環境を作っていけるのではないかと思います。

## 13) 変化を起こしている先生

高木先生は学校の地域活動の窓口となる地域連携担当係をされています。最初は高木先生が、この子もう少しここをこうすれば伸びるのではないかと、とか、地域系が合っているのではないかと、と思う生徒をYKGへ連れて来てくれていました。でもまだまだ学校の中では、地域活動は勉強の邪魔という雰囲気もあるのです。勉強をした方がいいと言われる生徒もいるので、そこはお互いに連絡を取り合っていました。そして、高木先生に連れてこられた生徒を、YKGの活動に参加させ、その活動内容を高木先生がその生徒の入試に活かして、進路を切り開いていき、プラスにしていきます。矢掛高校には「やかげ学」という地域に生



徒を出していく仕組みがあるので、そのコースに所属している子は地域で活動できますが、それ以外の子たち、特に勉強しなければならないと言われるコースにいる子たちを、ひそかに私たちと繋いでいてくれていました。高木先生が連れてきてくれた生徒たちを、YKGの活動を通じて成長させるということをしてきました。

西日本豪雨災害があり、その活動を通じて地域コーディネーターとして学校に信頼していただけました。矢掛高校が存続の問題などの中、様々な面で進んでいく中で、地域との関係を強化しようということになり、地域コーディネーターが必要となり、私が学校に入ったというのが経緯です。そこをずっと同じ想いで支えてくれたのが高木先生でした。

学校の中に入ってから分かることも沢山ありました。以前、私は気軽に高木先生に「今度活動があるので、高校生も参加しませんか？」という声掛けをしていました。ですが、先生が生徒を学校外に出すのは大変だということを思いました。**やはり先生に想いがないとできない。**自発的に来る生徒もいますが、**何かをしてみたいという想いが生まれた生徒が、高木先生に「井辻さんのところに行ってごらん」、と言われて来るパターンもある。**こうして来た生徒はちゃんと道筋を持っているので、簡単です。そうではなく「**地域などどうでもいい・・・**」という感じの生徒の中で、「**この子は地域系だ。**」というのを高木先生が見抜きます。高木先生に「**とりあえず行ってみて。**」と言われたので来た、という生徒こそ、**すごく伸びるし、変化するのです。**そういう先生の力があっ

て、今までこういう流れがあったのだと初めて知りました。他の県立高校のコーディネーターや先生に聞いてみても、最初から地域活動をしたい生徒ばかりではないので、いかに声を掛けて育てていくかが大事なのだと言います。ですが、想いを持っていなければ声を掛けたりしないので、そういう先生がいる高校はラッキーだと思います。そんな先生がいたのが矢掛高校だった、と高校の中に入って知りました。



#### 14) 制限を乗り越えていく中での失敗は？

**子どもたち自身がやっていることに失敗はないのだ、ということ活動を中思っています。**大人が「それをやったら失敗するよ」と言ってしまうようなところを、子どもははるかに超えていくので、活動内容に関しての失敗というのは、子どもがやったことに関しては、本当に失敗はなかったと言えます。

自分自身の中で、苦い思いというのは2回あります。1回は、私が事業を任された1年目、初めての事業で、正しいことをするというにこだわっていた頃、この事業をちゃんと終わらせたい、という思いがありました。**事業を申請する際に、最初に成果まで書いて出します。何が起こるか分からないことなのに最初に成果を決めるのは少しおかしいとは思いますが。そして、その筋道通りにいかず焦りました。**この日までには答えが出てないといけない、と筋道を立てていたのに、子どもたちは「ゴミをなくすためには、どういうことをしたらいいのだろうか？」と、答えが出ないままずっと悩んでいました。私は「この事業は失敗す

る」と思い、誘導しそうになったのです。そして、答えを出そうとした時、室先生から「**井辻さん、“放牧”だよ。**」と言われたのです。その“放牧”というのは、ある程度の安心安全の囲いは作りますが、その中で失敗も何もかも含めて自由にさせる、ということです。その時、私自身が失敗しない、とか成功させる、ということにすごくこだわっていたとういことに気がきました。これは自分が初めて取り組んだ事業だから、失敗してもいい。それよりは子どもたちが、こんなに悩んでいるのであればそれを無理なく流れに任せてあげる時間を作りたい、と思い、そのとき腹をくくりました。**すると、びっくりするようなアイデアを子どもたちが出して、すごくいい流れになって。私が誘導しようとしたゴールよりはるかにいいゴールにつながっていったのです。**あのとき誘導していたら本当にダメだった、という苦い思い出があります。

二つ目には、それでも人間はそう簡単には切り替わることはできないものです。カフェの開催の前日の段階で、全然整ってないこともある。朝市開催の前日になって「これを売りたいのです。」と言い出す。こうした子どもの思いつきを大事にしたい、でも、お店を出してお客さんにお金を払ってもらう以上は、このラインがあることが私の中では恐怖になっていました。以前、子どもたちがすごく頑張って前の日の夜遅くまで準備をしていたのに、色々とうまくいっていないことがあって準備が進まず、「大丈夫だろうか？」と大人も心配し始め、結局大人も手伝って何とか準備を終わらせました。当日は思った以上にお客さんが来てバタバタしていました。その時の失敗があるので、次の年から改善されましたが、その年にメインで頑張ってくれていた子の想いを汲んであげられていなかったことがありました。後から、「あのとき実はこういう思いだった」、「本当はあれでいいと思ってやっていたのに・・・」、と、**意志の疎通ができないまま、大人が手伝ってしまったことで、傷つけてしまった子どもがいたので、それは今でも自分の中では、すごく苦い思い出としてあります。**全員の想いをくみ取るのは無理ですが、「こういう風にやりたい」という思いに未熟さがあるのが子ども

なのに、つい大人の成功論でその思いを踏みにじってしまったというのがあります。

いまだにせめぎ合いのところがありますが、店として出してはいけないものもあるので、もう少しそこを話し合えたら良かったと思います。頑張っている子ほど言わないので、もっと聞いてあげられたら良かったと思います。それは今でも失敗したなという思い出の一つです。

### 15) 今後の展望

やはり垣根を超えていくような仕組みができたらいいなということを一番思います。県立高校であろうが、矢掛町であろうが、結局矢掛町に生まれた子どもは、小中高と育っていくフィールドはずっと一緒なのに、ここからは義務教育だから、という理由で、つながりがなくなってしまったりします。それが一人の子どもとして見た全体像でつながっていく教育の在り方になっていけば良いと思います。

今、「やかげ学」を通して、少しずつ高校と中学校の連携や小学校と高校の連携があり、子ども同士がもっと日常的に触れ合っていけるような環境づくりが出来ています。それが実現するかどうかわかりませんが、もっと一人一人が自由に生きることができる世界、自由に生きている人が批判されない世界が出来るといいなと思います。学校にいればいるほど思いますが、本当は1時間目から全員が国語をやりたいなどと思っていないと思うのです。国語をやりたいと思う子もいれば、今は数学の気分だという子もいるはずなのに、学校に入った瞬間に揃えないといけなくなる。そんな風に思うのは「わがまま」だとされますが、そうではない気がします。大人も含めて、もっと自由に子どもたちが、今の自分を自由に表現できる環境ができて、その個性を「あなたがおかしい。」ではなく、「あなたの個性はすごい！貸してちょうだい！」といった雰囲気になっていくと、本当に良いものができるのです。同じものを教えようとすることも大事ですが、そういう環境がもっと増えていくようになれば良いと思います。

**YKG でやってきたことは、本当に枠を超えて表現する力や自分を信じる力、いろいろな人と協働して面白いことを体験していくことです。それ**

**が、学校教育が、YKG が、というよりは、色々なところでそういうことが起こっていくようになれば良いと今思っています。**

先生の仕事について理解していなかった頃は、「幅広く子どもを外に出せばいいのに」とか、やや批判的な部分もありました。学校に入ったら、先生はすごいなと思いました。こういう枠組みの中でできる精一杯のことをやっているのだと。生徒40人中、ほとんどの生徒が地域に興味がない状態で、少しでも視野を広げるために響くか響かないかわからないが、みんなに提供する機会を作っているのが先生です。その中から興味のある生徒、そうでない生徒を見ながら、さらに刺激を与えていっているのが先生です。そこは尊敬しかないです。

数学をすごく愛している先生もいるし、国語をすごく愛している先生もいます。本質をもっと伝えようとしている先生がいます。先生は教育の中でやりたいと思っている部分にもっと集中出来る環境づくりをした方が、上手くいくような気がします。



### 16) 2018年西日本豪雨災害のこと

矢掛町の中川という地区が被災しましたが、YKGの子たちの母校もあり、たくさん関わりがあったので、すぐにお手伝いに行きました。小学校と公民館と保育園がかなり浸水して、手伝いや片付けに行きましたが、皆さん、やらされている感が殆どなく、ドロドロになりながら、楽しんでいるようでした。小学生が「雑巾が重たい。」と言いながら遊んでいたのもとても印象的でした。それだけではなく、中川公民館の館長さんが「子どもは宝だ」という考え方で、その当時中川公民

館の全ての活動は子どもが主体でした。開催される教室は子ども対象のものばかりで、それに地域の大人が合わせていました。会議でも子どもにこれをやらせたいから、地域の大人に手伝って下さい、とお願いしていくようなあり方だというのを伺ったことがありました。結局、頼まれた住民たちも子どもによって幸せになっているので、その地域性がすごく良かったのです。

そこが水没してしまって、館長さんも落ち込んでいた。それを見ていた子どもたちや地域の人たちが進んで手伝いをしていました。子どもたちが館長さんに何かを返したいということになり、それもお金を渡したらカッコいいのでは、と。子どもらしいですね。さらに近所のお祭りが自粛ムードでほとんどなくなってしまい、コロナの今もそうですが、当時も全然楽しくない、と子どもたちが言っていました。小学校も浸かってしまい、1年生の物がほとんど使えなくなってしまったので、上履きや、算数セットなどを集めてあげたいという話になりました。

さらに、夜市を開いて自分たちも楽しめるイベントにしたい、バザーのように物を集めて、被災した人に渡して、その売り上げのお金を館長さんにカッコよく渡したい、ということになりました。驚くようなアイデアでしたが、さらに「真備町の人たちにも来て、と言おう」、「夜市のチケットを無料であげよう、それを支援にしよう」、と考えて、開催しました。予定では200人ぐらいの規模のイベントのはずが700人も来て、本当にてんやわんやでしたが、館長さんにお金を渡すこともできました。

日常からしっかり関係性ができている地域というのは、いざ何か起きて迅速にしかも主体的に支えあうことができる。矢掛高校にいる子たちの中でも、中川で育った子のボランティアの参加率が高い。中学校になると彼らは「テゴタイ」と呼ばれる。その「テゴタイ出身です。」という高校生がいる。そうした地域性がすごいと思いました。

矢掛町内の公民館の活動も少しずつ子どもに大人と一緒に何かを企画させる、子ども主体で何かをする、大人と子どもがつながって、やらせるのではなく一緒に作る、という企画が増えていると

感じます。実際にそのような視点を大事にしている社会教育主事の方がいます。私が最初に見たところよりも計画表が少しずつ変わってきたと感じています。

## 17) 人が変わる瞬間

**私が一番楽しいのは、子どもが変わった瞬間を見ることです。この良さを分かってもらいたい先生には、直接見てもらった方が早いので、現場に先生を連れていくのが一番良い。**分かっている先生たちは、そこを知っています。顔を伺ってばかりだった子どもが自分から意見を言うようになったとか、自信がついている、人に合わせてニコニコ笑うだけだった子が自分の意見を言うようになったなど、学校の先生から言われることがあります。お母さんは子どもの変化を知っていたので、その変化を「学校の先生を感じる程というのはすごいね」、と言う人もいます。高校の担任の先生もたまに、あの子変わったと言ったりします。

子どもが変わって、それを見た大人、特に教育に関わっている先生や親は、一番影響を受けていると思います。**多分、先生たちが一番やりたいのはそれなのではないか**と思います。**教育に携わるということは、人が育つ、人が変わる瞬間というのが醍醐味だと思うのです。**そこに愛を感じる人が教育をやっているのではないかと思います。ただそんな思いがあっても、学校教育の仕組みがあります。どうしても変えられない仕組みや在り方、そこの中ばかりを重視していると、やはり見えなくなってしまう部分はある。

**子どもはただ大人に言われたことを「すれば良いんでしょ?」、としているだけで、それを「しなくても良いんだよ」と言われた瞬間に、もともと持っているものが爆発するだけ。**それができないのが大人なので、大人が「脱いでもいいよ」と言える筈もなく。私が言えなかったように。「(鎧のようなものを)脱いでもいいよ」と言ってあげて、「ああ脱いだらすごいな。自分も脱いでみようか!」という風に、大人がなくなっていくことが大事かなと思います。

### 1) 矢掛高校の神楽係

3年前に矢掛の町をインバウンド観光で盛り上げたいと言う生徒たちがいて、彼らは「矢掛の備中神楽を定期公演化し、観光の目玉にしたい」というビジネスプランに応募して賞を頂きました。それを引き続き有志でやっているものです。受賞した生徒たちは卒業しましたが、こういった地域の祭りなどとコラボさせて頂いて、できることを探しているという状況です。



ここ（新山地区）は私の生まれ育った地域ですが、ある日この辺りの青年団の知り合いと私が一緒に草刈りをしている時、「今度あの神楽やるんじゃないけど来てくれん？」と言われました。現在の矢掛高校の神楽係の生徒の中には、神楽が好きで入っている子がいるので、学校でそのことを話すと、「ぜひ行きたい」と言い、出場することになりました。

### 2) ESD との出会い

私が生まれたところも田舎で、小学校の頃から人数が少なかったので、いわゆる過疎化をどうしたらいいのかというのは、小学校時代からなんとなく危機感を感じていました。その後、たまたま矢掛高校に転勤してきた時に、少子化の影響を受けて統廃合になりました。統廃合後の高校の「売り」として、室先生という先生が中心になって環境教育に取り組みようとしていた。しかし当初、私はよく分からないことで、できれば関わりたいくない感じでした。

2年3年と経つ内に、いつしか私も環境教育や地域連携の現場に行くようになっていました。そのうちに、その活動が、自分が子どもの頃から思っていた過疎化問題などを生徒と一緒に考えられる、あるいは活動して何か現状を変えるきっかけになれるかもしれないという感触を持つようになってきました。その先輩が転勤した後、その後継が私の方に回ってきたので、いい機会かなと思えば腰入れて地域の課題を考えるようになりました。

2014年の世界会議と、矢掛の活動は別枠で、並行して動いていた感じはします。地域の問題をなんとかしなければというのは学校の課題としてありますが、教員は転勤があるので、地域活動を継続的にしていく方法が必要でした。ユネスコスクールにも同時に加盟して、2014年に岡山でユネスコのESD世界会議があった際、私は県内の高校ネットワークのお世話もしました。県内のユネスコスクールには同じような課題を抱えている学校もあり、これから地域の問題に取り組まなければいけないとも言われていました。3年前に生徒が発案したインバウンド観光も、たまたま「外国の方を地域に呼ぶ」という発想でしたが、そのESD世界会議で、生徒が海外の高校生と話している場面を見て、高校で地域の課題に取り組むということと、国際的な視点を育むESDとが、案外相性が良いのだと思いました。

### 3) ESD を始めた時の周囲の反応

私も実はそうでしたが、ESDは教科書には書いてないことで、当時はまだESDは学習指導要領に入りかけたばかりだったので、教員としては自分が教えられる自信がない分野には距離を置かれるところはあったと思います。普通科的な進学を前提とした学校教育では、5教科の勉強をしっかりと定着させて、筆記試験で大学合格というパターンの方を中心に置くべきだという雰囲気があります。よって、環境学習や地域連携という、教科以外で生徒の個別最適化を促していくような分野については、専門的にやっている人にしてもらえば良い、という雰囲気は管理職も含めてあったと思います。

そのような中、周囲に対して、正面からアプローチするというのはなかなか難しいと当時は思っ

ていました。どちらかと言えば、じわじわとアプローチしました。例えば、「生徒がこんな活動をして、発表して賞を取りました」とか、「この活動を上手く面接で話して、大学に合格できました」といった、生徒の変容や実績みたいなものを、まずは積み上げていくことをしました。

生徒への関わりは気の合う仲間と一緒に、つまりゲリラ的というか、出来るところからやってきました。ただし、やはり限界があります。全体の流れとして学校に取り込んでいくには、まずは情報開示しなければならない、と思いました。そこで、転勤された室先生から、今まで何をされてきたかを聞き取りして、その内容を少しずつ、「ESD通信」としてまとめたものを、さりげなく職員室の先生たちの机の上に置いていきました。そんな風に少しずつ地道に情報開示していきました。次第にその実績や活動内容が理解されるようになり数年経った頃、今度は組織としても実際に地域連携をするような部署を少しずつ作るようになりました。ちょうど学校が定員も減っていく時期でもあったので、縮小に併せてESD課という独立した課を設置し、ESDに関するを進めていく校内組織の窓口としました。



#### 4) 生徒の変容

今年の神楽係は今日が初めての取り組みで、教員としてみると、少し動きが悪いような、まだもじもじしているなどという所がすごくありますが、それは場数を踏んでいくと変わります。自分たちから話に行き打ち合わせできるようになる、現場に出ると積極性が上がっていくというのは、引率すると分かります。学校で習うことは正解が決

まっているので、答えが出ていないとやってはいけないという呪縛のようなものを、生徒が持っていることが多いのです。でも、現場に行くと、そこら辺のおじさんに急に「これやってくれ」と言われ、その場に行ってから答えを探すと、正しくなくてもとりあえずやってみていくということが起きます。失敗する機会が沢山あります。失敗した時どう自分でリカバリーしていくか、とか、授業でこちらからは教えられないことを生徒は身に付けているというのは、引率すると分かります。

#### 5) 教師の変容

若い先生には、明らかな変化がある様に私は感じています。ベテランの先生は今までに蓄積されてこられたそれぞれのやり方、生徒を上手く育てられる手法を持たれていて、なかなかそれをゼロから崩すのは難しい。若い先生は初めての教育体験だったりするので、最初からESD的な考え方、失敗してもそれを糧にやってみていくことを体感で学ばれると、4月に入って1年経った時で、全然動きが違ふと感じます。なかなか難しいですが、例えば教育学部でその場その場で対応出来るような学びがあれば、ESD的にはとても良い先生になるだろうと思います。

#### 6) 自分自身の変容

一つはスケジュール通りに自分が動かなくなっているということを感じています。色々新しい事、新しい素材等が入ってくると、自分ではこうしようかなと思っていただけれど、こっちの方が良いかなという新しい一手のようなものが出てくる事がある。その新しく入ってきたものに合わせ、あまりこだわりなくやってみようになりました。その場その場で判断しながらしているので、スケジュール通りに動いて欲しい先生からすると、ちょっと迷惑かもしれません。

ただ、臨機応変に動けるといのは、ある意味開かれた学校の一つの課題だとも思います。生徒と一緒にESDに取り組む中で、その教員自身が鍛えられるというところでは、ESDに関わっていて得をした感じがします。失敗というのは、どこにゴールを置くかの話であって、多分ここで失敗しても、これ改善して次の機会に更に良い方向

に持っていけば成功、という話なので、失敗感覚が自分の中では無くなりました。いわゆるPDC Aをぐるぐるぐるぐる回していく過程の中で、どの辺りを見るかによって、この先もあると期待して過ごしていけるようになったかなという感覚があります。

## 7) 負担感は何?

大変ということは自分自身では感じていません。ただ、自分の中で面白いと思えなければ続かないので、なるべく面白い方向に転ぶように、色々なアイデアや素材を混ぜてみたいと思っています。生徒には、「先生、何だか全然本気になってくれない」などとよく言われますが、**自分が思い描いたものになっても全然面白くないので**、色々な人の「へえ!」とか「ほお～」といった、驚きの要素が入ってきて変化していくというのが、一番面白いところだと思っています。

## 8) 持続可能な社会に向けた教師の役割

持続可能な社会を作っていくのは人なので、その人作りに関わっている教育関係者は、凄く大きな役割を持っていると思っています。私は小さい時からヒーローものが好きで、別に自分が正義のヒーローになりたいわけではないですが、持続可能な社会をつくるESDとは、「今、地球の危機だ!」「それにどう対応していくのだ、これからの若人よ?!」といった感じで、本当に正義ものやヒーローものをやっている様な感じがします。学校はそこでの“ヒーロー養成所”のような感覚がしています。「このままいくとまずい」、「人類の大きな敵に対してどう向かうのか」、ということ—正しい事やこういう結果になるということ—を予測して教えるのは無理ですが、「自分も含めて力を合わせて頑張る、もしダメだったら、ちょっと栄養補給してまた頑張ろう!」といった姿勢でいると、教師というのは疲弊もせずに“地球防衛軍”の一員として頑張っていけるのかなとは思っています。

最近は、コンプライアンスの関係があったり、情報もどんどんシェアされたり、色々難しい事も出てきています。以前はできていたことが今は難しい。例えば、昔話の桃太郎のように勧善懲悪的に単純に問題を解決していくことも難しく、の

んびりとした暮らしの理想を実現するということはすごく難しい。色々な所で規制があって、役割分担がされている。しかし、決まりやルールの間をどう繋いでいくか、楽しくやっていくかというところは、それこそ地域のいろんな場面で、その場その場で体得していくものなのかなと思います。そういう間を埋める役割も、学校の役割として少しずつ出てきていると思います。



## 9) 地域コーディネーターの存在

これは大変有難いことです。教員は8時から17時までずっと学校から外に出られない。土日にも部活などがあります。よって、この地域の情報を持ってきていただいたりとか、実際に生徒を地域に連れて行っていただいたりとか、地域の繋ぎ役になっている方がいるということは、本当に大助かりです。地域コーディネーターに入って頂いて二年になりますが、**このパイプ役がないと今の教育は考えられない様になっているし、これからはどんどんそうなるのではないかと思います**。地域のコーディネーターの方を通して、学校も地域もお互いを知っていく。じわじわとした交わりが必要なのだと思います。

## 10) 今後の展望

ESDの世界会議を経て、このまま解散するのは勿体ないので、岡山県のユネスコスクール加盟校(当時9校)の教員で話し、岡山県ユネスコスクール高校ネットワークを作って、今年6年目です。ネットワーク作りが面白いと感じ始めています。ネットワークでは、毎年秋に集まって、それぞれの学校の課題やESDの活動について話しています。生徒にとっては毎年違う生徒が来るの

で、そこで驚きを得たりとか、こんな事もやりたいという想いが出てきたりします。昨日のユネスコスクールネットワークの会では、「あそこの学校とコラボレーションしてこれをやってみよう！」という発想も出てきていました。都会の学校と田舎の学校が知らない間に敵対関係になっているよりは、早いうちに交流するのが面白いのではと思っていて、**高校どうし、あるいは同じ地域の小・中・高校どうしが何かコラボレーションする機会が作れたら、と個人的な企み・方向性として思っています。**矢掛町の地域の中でも今、リージョナル・モデルということでネットワークを作っていますが、小・中・高と色々と連携して、情報交換から始まって、できる事をやっていくのも面白いと思います。



## 11) 2018年西日本豪雨災害のこと

あの時やはり感じたのは、学校としてはそれこそいろいろ規制とか、安全性とかもあって動きづらい所も実はありました。しかし、そこにカタリバというNPOの方が支援に来られて、たまたまそこでいろんな情報交換ができました。更にそこからNPO中心に、学校と町が連携して、生徒に通学バスを援助できた等、具体的な事ができました。その時に、学校の外の方といち早く繋がれたという所は、ESD活動の効果を感じました。先程言ったネットワーク作りなんかその延長線上にあるのではないかなど。**学校は様々な専門性を持った人が集まっている割と限られた集団ですが、外に目を向けると、特定の分野とかテーマに関して思いがある方がたくさんおられます。**豪雨災害の時に、「学校の中ではできなくとも助けて

あげられるよ」とか、「一緒にやりませんか?」といった申し出が色々あり、そういう方々の支援や思いを頂いて学校が動くというのが分かりました。それが今のESDの基になっていると思います。

## ■岡山市立御南中学校「スクール・パートナー」 今村 恵美子さん

### 1) 中学校に関わるようになったきっかけ

10年ぐらい前に地域の人から、学校が大変らしいということを聞きました。学校に行ってみると、子どもたちの問題行動が多く見られました。学校は本当に大変な状況でした。

地域の人も心配していました。地域の各種団体の会長さん、副会長さんが中心になって、地域が一丸となり、この中学校をみんなでどうにかしようということを話し合いました。

### 2) 生徒たちの変化

そこでまず、私たちは今ある学校支援ボランティアという名前を、スクールパートナーという名前に変更しました。そして、スクールパートナーを募集しました。50人ぐらいの人が集まりました。最初、私たちはどうしたらいいか分かりませんでした。皆、必死でした。まず会員全員が、グループに分かれて、毎日交代で見回りや声掛けをしました。会員の中には、子どもたちを厳しく叱ったり、腕力で押さえたりすればよいという意見もありました。

しかし、私は「それは逆効果だ」と言いました。「それよりも温かい気持ちでその子たちに笑顔で挨拶をしませんか?『風邪を引かないでよ』など、気を遣うような言葉を掛けませんか?」と言いました。そして私たちが声を掛けるときは、**心がこもっていなかったら子どもたちには通じないということも言いました。**特に問題行動を起こす子どもというのは繊細な子が多いです。あの子たちは、私たちの心の中を全部見えています。私たちがどう思っているのかをよく分かっていますのです。**私たちは、本当に心から優しい気持ちで、笑顔で、声を掛けることから始めました。**会員の中には、そんな甘いことを言うことはできない、な

ど、反する意見もありました。しかし、しばらくすると、会員みんなが本当に優しく声かけをするようになりました。そうするとだんだん多くの子どもたちが挨拶をするようになりしました。問題を抱えている子どもたちとも会話ができるようになりしました。

その会話の中で、私が一番感じることは次のことです。それは、問題行動を起こす子どもたちは居場所がないということです。その子どもたちは「僕たちが、公園に行くと白い目で見られる。」「店に行くと怪しいと思われる。」と言いました。私は「それなら私の家においでよ。」と言いました。すると、本当に毎日のように子どもたちが私の家に來ました。私は、家に來た子どもたちに次のようなことを言いました。「玄関で履物はきちんと揃えようね」「手を洗おうね」「お邪魔します、ごちそうさまでしたなどの挨拶をしようね」「自転車はきちんと並べようね」「雨が降るときは傘ではなく、カップを着ようね」など。社会での基本的なルールを教えました。すると彼らは素直にルールを守りました。私は「みんなはいい子だね。百点ではない、百二十点だよ!」と言いました。そして、だんだん他の人に迷惑を掛けることがなくなり、無事に卒業しました。今は、仕事を一生懸命頑張っています。

問題を抱えている子というのは、愛情に飢えていると思います。私はみんなをハグしました。私を見つけたらいつもとととととと走って来て、ハグをしてなかなか離れません。ハグや、手のぬくもりはすごく愛情を伝えると思います。

### 3) 自分自身の変化

無条件で、子どもはみんな可愛いです。みんないいところを持っています。私が無条件で可愛いと思っているので、子どもたちは安心できるのだと思います。私は、どの子も可愛くて仕方ありません。ある子が、卒業式におかあさんと一緒に花束を持って來ました。本当に嬉しくて泣きましたよ。やはり皆に温かい気持ちで接すると本当に良いと思います。

私が学校の菜園で作業をしていたら、問題を抱えている子どもたちが手伝いに來ました。一生懸命水を汲んで、色々と手伝ってくれました。私は

嬉しくて、「すごいなあ、助かったわ。ありがとうね。」と言いながら一緒に作業をしました。その子どもたちは叱られることはよくある。しかし、ありがとうとお礼を言われたり、褒められたりすることは少ないのです。だから何でも一生懸命に手伝いをしてくれました。

### 4) 学校の変化

今は前のように皆での見回りはしていません。学校が良くなったので、先生たちや地域の人たちも安心しています。

本当に嬉しいです。ここまで良くなるとは思っていませんでした。本当に幸せです。今は登校時、子どもたちみんなが挨拶をしてくれます。みんなとってもいい子です。



### 5) 「ボランティアの環（わ）」

これからは中心ではなく、お手伝いの立場になりたいと思っています。私の後任の方に引き継いでもらい、活動を続けていってもらいたいです。活動をするときの心を、伝えていきたいと思っています。活動させていただくことによって、自分も幸せな気持ちになるのです。してあげているという気持ちを持つと、続かないと思います。

この地域では良い環がつながっています。これからもそれが崩れないようにしていけば良いと思います。今は何かをするとき、みんなにお願いをすると、必ずそれに協力してくださる人がいます。有り難いなと思います。何をする時でも、みんなが一つになってできることに感謝をしています。

最初は大変なこともありました。ですが、悪いことがあったら、やはり良いことも絶対あるのだと思います。私自身も、後継者の方との出会いが最高でした。本当に良かったと思っています。

## ■岡山市立御南中学校 江口 峰男校長

### 1) 教育理念・想い—社会教育の経験から

**人は誰もが、人から認められ、求められる存在になることが、楽しいのではないかなと思います。**学校生活の中でも、そのような場面をたくさん求めることはできますが、そのチャンスをもっと広げてみたい、というのが私の想いです。

本校の学校教育目標として、「様々な体験を通して共に認め合い、そして高め合う生徒の育成」を掲げています。そのバックボーンとして、大切なことが4点あると考えます。1点目は、生徒が通いたいと思える学校にすること。2点目は、保護者が通わせたいと思える学校にすること。3点目は、何よりも、地域の方が学校のことをしっかり理解されて、学校の教育活動に協力したくなるような学校にすること。中学生を地域のミドルリーダーとして活躍できるような人材にして送り出せるような仕組みを作ること。そして4点目が、本校に勤める教職員が、この御南中学校に勤められてよかったと思える学校にすること。職員の自己実現につながる職場にしたいと思っています。

この4点は、保護者や、地域の人との関わりがなくてはできないことです。学校が、地域との連携をしっかり作っていくことで、子どもたちが人から求められ、そして頼りにされる存在に育てほしい。子どもたちが自己肯定感を高めて、自信をもって成長してほしいと願っています。

私は、縁ありまして、学校教育から少し離れる機会を頂きました。社会教育（岡山県の教育委員会の事務局と岡山市の教育事務所）と青少年教育（国立吉備青少年自然の家）です。学校教育は“雀の学校”、社会教育は“メダカの学校”というように、学校教育とは違う様々な学びがありました。

学校の教員は、学校教育しか見えていない部分があります。しかし、一歩外に出て、外から学校教

育を眺めてみた際に、様々なアプローチがあるのではないかと感じました。教育活動は、学校だけで完結するのではなく、地域の力を借りることで、もっともっと、その可能性が、広がるのではないかという考え方につながったのです。

### 2) 地域との関わりの中で、教師の取り組みは？

やはり学校では授業が一番だと思います。まず、分かる授業を行うこと、子どもたちに確かな学力をつけさせるという授業改善が一番であると思っています。2点目として、**子どもたちが力をつけ、自己肯定感を高めることを目的に、学校、学年、学級行事を教員主導ではなく、子どもたちに任せました。**子どもたちが考え、企画し、準備を含め当日の運営まで行う。そして教師は、**振り返りの場面をしっかりと保証する。**子どもたちの主体的な活動の場を設けるということでした。

本校では「体験の風をおこそう」という言葉を掲げていますが、体験を通して、成長の過程をチャンスとして与えるということです。ここで大切なのは、どのようなビジョンをもって、自分たちは何ができるのか、どうしたら良いのか、というのを一人で考えるのではなく、集団で考えて取り組んでみることにしています。その結果がどうであったかを振り返って、それを次につなげていくというPDCA—これを回すことが必要です。



3点目に、**校長室が学校支援地域本部という地域の活動の本部になっています。**学校が、これまでにない地域連携の仕組み作りをして、地域の力を入れていくことで子どもたちを変容していこうという思いに至りました。

### 3) ボランティア活動を切り口としたアプローチ

子どもたちに体験の機会を保証するために、**単なる体験ではなく、本校ではボランティア活動に特化し、焦点を当てたアプローチを目指しました。**多くの生徒にとって、ボランティア活動のスタートは、進路決定の際の得点稼ぎです。それから、ボランティアの募集をかける地域の方、大人の方は、高齢化が進み、行事に参加する人数が少ない、そこを中学生に手伝ってもらいたいという単なる労働力として求めていたのです。子どもは、ポイントが欲しい、地域も労働力が欲しい。これは、ある意味 Win-Win です。どちらの希望も叶う。しかし、私は、その質を上げたいと思いました。**単なるボランティア活動に「参加」するのではなく、「参画」させてほしいということ、学校からの仕掛け作りとしてお願いさせてもらいました。**

そのスタートは公民館です。公民館へ生徒が入り出すということは、保護者も地域の方も非常に安心されます。公民館に出入りすると、そこには地域の指導者も集います。子どもたちは、事前に説明を受け、この予算で、この時間で、これをやるのだということで、企画書を出し、それを練りながら何度も何度も準備を重ねていき、**参画させてもらう。打ち上げ花火の一発ではなくて、継続的に、シリーズで何回かしていただくようにするのです。**すると、子どもたちは、一回目で失敗したとしても、振り返り、二回目ではここを直そう、と質の高いボランティア活動に発展させていきます。

その姿を、今度は参加した小学生が、「ああ、お兄ちゃん、お姉ちゃん、中学生頑張っているなあ」と、「私も中学生になったらあんな風に活躍したい」と思うようになります。この中学校区には、2つの小学校があり、ある小学生は、学校の先生に、学校の行事や地域の行事に、「自分たちにもボランティア活動の機会を与えてほしい」と言ってきているという話を聞いています。そういう歩みを始めたところです。さらに、就学前の園児が、小中学生を見て、自分たちもあんな風になりたいという声があるようで、**ボランティアはヒーローになっています。**

最初はポイント稼ぎのところから始まったボランティア活動ですが、そのうち、中学生は、ボランティア活動が人のためだと考えるようになります。中学生からこんな振り返りや声がありました。「**ボランティア活動は、結局、自分のためにやっているように思える**」と。企画から参画させてもらおうと、いろいろな人の気づきや学びから、学校ではできない経験ができた。次にボランティア活動をやったら、どんな経験ができるだろうか、自分の意見を聞き入れてくれるだろうか、それが受け入れられると大きな自信になるのです。**ボランティア活動は自己実現のワンステップとして捉える子どもたちが増えてきて、私は本当に喜んでます。**

自立に向かって成長する子どもたちは、学校だけでなく、地域に活動の場を広げることによって、自信をつけたし、目つきや、活動や、対話が、豹変しました。学校、学年、学級行事を組むときにも、その力が発揮されるのです。つまり、**学校でもその力が働いているということです。ボランティアの募集をした方も、行った生徒も、学校の方も、三方良し、Win-Win がトリプルでつ**



**ながっているような現状です。**

### 4) 地域との関わり方の発展

岡山市には、岡山っ子育成条例があり、「家庭、学校園、地域社会、事業者及び、市は相互の信頼関係のもとに協働して、子どもの心身の発達に応じて、適切に子どもの育成に取り組みましょう」というのが基本理念です。

公民館活動に関わっていくと、たくさんの指導者と出会う機会が出てきます。中学生が地域のミ

ドルリーダーとして活躍していることが、公民館発で、地域に伝わります。そして、同じような目的で活動する地域の団体や市民の会のようなところから、ぜひ中学生を自分たちの活動にも取り入れてみようと呼びかけられます。

現在、北長瀬駅周辺で活躍されている市民団体「操車場跡地にできる新公園を活用する市民の会」があります。そこにも中学生が継続して参加しています。中学生は、さらに学区民の体育祭、運動会のプログラム運営に関わっています。最近では、中学生が、防災訓練のイニシアチブをとるところに発展させていっています。



## 5) 教師の変容

目の前にいる子どもたちの変容ぶりですが、学校の教員は、あたかも学校教育によって子どもたちが成長し変容したと自画自賛的に受け取りがちです。しかしながら、現在も日常的に地域の方がスクールサポーターとして学校に出入りして下さっています。例えば、**年中通してお花が咲いたり、安心して授業が受けられるように見守り活動などで、環境を整えてくださったりしています。テスト期間中にテスト勉強のお手伝いや、違う視点で子どもに声かけをしていただいたりしています。本当に目には見えないですが、教員だけでは成しえない、大きな力を生んでいるということ**を理解できる教員が確かに増えました。

土曜授業等、新たな講座を開いて、そこに地域の方に講師で入っていただくなど、これまでになく、**地域とより積極的に繋がってこうという教員も増えてきました。**これは、本校での取り組みなのですが、教員もそれぞれ家に帰りますと地域

があります。本校の勤務とお休みと重ならなければ、（現在、部活動は土日の1日はお休みをするというふうになっています）教員もそれぞれの居住地である地域に関わってもらえると、この学校の実績がそれぞれの地域にも還元できるのではないかと考えています。

## 6) 自身の仕事観

私は、できるだけ日常の授業の様子を見て回るようにしているのですが、それは短時間しか学級に滞在できません。土曜・日曜にわざわざ地域の活動に出てきている生徒の表情というのは、学校では見られない表情が見られます。それを見られるのが一番の楽しみです。その活動を**校長室便りで紹介**しています。それが、**子どもたちの励みになったり、子どもたちがいろんな場面で活躍していることを地域の方に知ってもらえたりするお手伝い**になっているのなら嬉しいです。それが私のライフワークです。

## 7) 手作りのトロフィーに込める想い

上の部分がペットボトルでできています。ペットボトルを切って、少し細工をして、それに塗装をします。そして、木を切り、穴をあけ、ペットボトルのキャップが入るようにし、表面はのみで削ります。そこに、私の感謝の気持ちを焼き込みます。ペンではなく、はんだごてで文字を焼き込んでいきます。よって、唯一無二です。あの方に、こんなところでお世話になったな、という感謝の気持ちや、あの生徒はこんな場面でよく頑張ったことを誇りにしてほしいという気持ちを、市販品ではなく、私からの、想いを込めたメッセージにして、焼き込んでいきます。それをサプライズで渡します。地域の方や生徒が、何年か先にトロフィーを見て、あの校長と出会ったという事を思い出してもらいたい。ボランティア活動が自己実現のためのライフワーク

として、時間を越えてつながり続けて欲しい。トロフィーは、その一つの架け橋になればありがたいという想いで作らせていただいています。（以上）



---

動画企画制作：岡山大学大学院教育学研究科 ESD 協働推進室

編集協力：（株）OHK エンタープライズ

協力（五十音順・敬称略）：

岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク学生スタッフ

岡山県立矢掛高等学校

岡山県教育委員会

岡山市教育委員会

岡山市立御南中学校

操車場跡地にできる新公園を活用する市民の会

ミナモト建築工房・くらしのたね

YKG60「やかげ小中高生連合の会」

動画教材および本書の作成にあたっては、2020年8月に岡山大学で開催したESD・ユネスコスクール研修会に参加された小・中・高等学校の先生、大学生の意見を参考にさせていただきました。

また、動画の構成案と編集にあたっては、ESDコーディネーターの片岡雅子さん、小森順子さん、原明子さん、およびESDコア・ティーチャーとして委嘱を受けて頂いた、岡山県立一宮高等学校の目崎浩子先生、岡山県立林野高等学校の佐堂幸代先生に指導・助言を頂きました。また、宮城教育大学の市瀬智紀先生、アジア・ユネスコ文化センター（ACCU）の大安喜一先生には、ESDの専門家としてのご意見・助言を頂きました。

●動画教材および本書は、岡山大学大学院教育学研究科 ESD 協働推進室のウェブサイトより視聴・ダウンロードできます。

URL: [https://edu.okayama-u.ac.jp/promotion\\_center/](https://edu.okayama-u.ac.jp/promotion_center/)

---

### 『ESD 動画教材「地域と関わりあう教師たち－ESD の発展に向けて－」副読本』

編著：岡山大学大学院教育学研究科 ESD 協働推進室・柴川弘子

編集協力：ESD コーディネーター・片岡雅子 小森順子 原明子

岡山大学大学院教育学研究科・藤井浩樹 長谷川めぐみ

岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク学生スタッフ・金居瑠璃子 兼田紗綺 田中日和

難波姫鶴 東山瑠夏



岡山大学

OKAYAMA UNIVERSITY



ESD動画教材  
「地域と関わりあう教師たち—ESDの発展に向けて—」  
副読本

編著・発行：岡山大学大学院教育学研究科 ESD協働推進室

岡山市北区津島中3-1-1

086-251-7723

発行日：2021（令和3）年2月28日